SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

言語記号としての複合名詞

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川口, 裕司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008909

言語記号としての複合名詞

川　口　裕　司

序論　形態論のルネッサンス？

生成文法学者たちはこれまで自分達の研究において統辞論と意味論に特権的な地位を与え、形態論の領域をどちらかといえば過小評価してきた。そのせいであろうか、彼らは70年代後半からとりわけ形態論および語彙論的分析にますます関心を示すようになった。Micheal Hammond と Micheal Noonan はその論文[1]の中で、生成文法の枠組みにおいて、語彙論と形態論的分析がどのように発展を遂げてきたのかを素描している。またフランスの言語学雑誌 Langages 78（1985年6月）は形態論の特別号に当てられている。このような言語研究におけるある種の流行を「形態論のルネッサンス」と呼ぶことができるかもしれない。というのも形態論はアメリカ記述言語学のみならず、ヨーロッパにおける構造主義言語学の中心的な関心事であったし、これからもそうあり続けるだろうからである。

本論考では伝統文法において複合名詞と一般に呼ばれている文法カテゴリーを中心に取り上げ、形態論的分析における複合名詞の言語学的地位を再度確認し直すと同時に、これまでしばしば行われてきた複合名詞を統辞論の立場から分析することの妥当性とその可能性を問い直してみたい。

Ⅰ　理論的背景

Ⅰ．1　ソシュールの連辞

複合名詞の「複合」という名前からも明らかなように、この言語形態は二つ以上の言語単位の結合から成り立っていると一般に理解されてきた。こうした言語形態に注目し、それに明確な言語学的地位を付与したのはおそらくソシュー

ルである。彼はジュネーヴ大学で行なった三回の一般言語学講義（1906－1911）の中で次のような定義を行っている。「お互いに連続して現れる二つあるいはそれ以上の単位の結合を連辞（syntagme）」と呼ぶ（G. Dégaillierのノート263, 1911. 6 . 27（?）[2]）。ソシュールの連辞という概念はその後、形態論と統辞論の分析に多大な影響を与えることになる。

ソシュールの連辞の定義はかなり自由度の高いものであり、この定義によれば複合語、派生語、今日連辞と呼ばれる言語形態、ひいては文までもが連辞の認定を受ける。以下では複合語、派生語、連辞のみを検討することにする。

ところで、ある言語形態を連辞として認定する際に、ソシュールは二つ以上の言語単位の間の連辞的関係（rapports syntagmatiques）ではなく、それらの比例的関係（rapports proportionnels）（彼自身は「連合」（association）と呼んでいるが）に基づいて認定を行った。A. Riedlinger のノート（II R 94）によれば、連合関係と連辞の認定についてソシュールは第二回目の一般言語学講義で次のように述べていることがわかる。「連辞が生まれ、連合グループが介入してくる。連辞が形成されるのは連合グループのせいなのだ。」[3]

連辞を認定する場合に、連辞的関係ではなく連合的関係に基づくという、一見矛盾するこの定義の裏に、我々はソシュールの方法論上の配慮を読みとることができるのではあるまいか。連辞の認定をその構成要素の連合関係に基づいて行い、構成要素のシニフィエに基づく認定方法を退けることで、シニフィエにより意味論的に連辞を認定する方法が持っている恣意的でやっかいな問題をソシュールは避けて通ることができたのだと考えられる[4]。

たとえば poirier「西洋梨の木」と poire「西洋梨」の間には、pommier「リンゴの木」と pomme「リンゴ」の間と同じ比例関係が認められる。こうして poirier, pommier はいずれも連辞として認定される。この定義により -ier は「木」のシニフィエを持つが、一方 pilier「支柱」における -ier はそのようなシニフィエを持たないというような議論を当面は避けて通ることができたわけである。

このソシュールの定義は、言語記号自体の定義を含め、連辞の言語学的地位を再度検討する発端となった点で極めて重要なものであった。

Ⅰ．2　ソシュールの連辞の問題点

我々は今日ソシュールの連辞がいくつかの問題点に直面することを十分に承

知している[5]。

まず連辞はソシュールが定義したように、二つ以上の言語要素が話線の中で継起して現れる現象を指すため、連辞を構成する要素の順序が問題となる。連続する要素の順序は連辞の認定に関与的でありうる。vingt-quatre「24」と quatre-vingt「80」がその例である。vingt と quatre のシニフィアンの並べ替え（permutation）は、この場合二つの異なるシニフィエ（「24」と「80」を生み出す。ところが poirier ではそのような並べ替えは不可能である。
この場合、二つの異なるタイプの連辞を区別しなければならないと考え、poirier のような連辞では構成要素が位置に拘束され（bound form）、それに対して vingt-quatre と quatre-vingt では構成要素の位置が自由である（free form）と定義したくなるかもしれない。ところがシニフィアンの連続は確かに現れる位置に拘束されると考えられるが、シニフィエのほうは位置に関して拘束されることもなく、自由でもない。上記の定義は、あくまでシニフィアンのみに基づいた形態分析なのであって、言語記号が宿命的にもっている二面性、シニフィエとシニフィアンを考慮した定義とは言えない[6]。議論を先に進めるため、今のところは、拘束形は伝統文法が派生語と呼んでいるカテゴリーに現れ、quatre-vingt, vingt-quatre のようないわゆる複合語には現れないことを確認するに止めておこう。

ソシュールの以下の言葉に一般言語学講義の聴講生は興味を抱いたのであろうか、ノートを取っている。「dé- をもつ他の全ての動詞がフランス語から消え去ることがあれば、défaire はもはや構成要素に分離不可能となることでしょう」(L. Gautier のノート 2.27b)。ここでもソシュールは連辞の連合関係にのみ言及し、派生語と複合語の間の連辞的振る舞いの違いには沈黙している。

次の問題はさらに重要な言語事実を指摘することになる。言語学の知識をほとんど持ち合わせない聴講生に連辞の概念を紹介する際、ソシュールは先ほど述べた pomme～pommier のような、シニフィアンとシニフィエの間の関係が恣意的（arbitraire）ではなく、有縁的（motivé）[7] な単語のペアを利用しながら説明を試みている。もちろんこのことはソシュールが連辞の認定において連合関係を規準にしていたことからも容易に理解できる。

しかしながら Henri Frei が指摘したように、有縁的な単語においてすら、ソシュールが言うような連合関係が、シニフィアンとシニフィエの二面において保証されるとは限らないのである。たとえばシニフィエの面から fraction「部分」は infraction「違反」と何等の連合関係も認められない。同様にシニ

フィアンの面から、intonation が架空の ＊tonation と連合するわけではない。

こうしたシニフィエとシニフィアンの二面性との関連について、ソシュール自身はドイツ語の接頭辞 ent-, er- の透明度の違いを述べるにとどまっている（第一回講義（1906－1907）A. Riedlinger のノート IR 2.40）。しかし「一般言語学講義」の編集者たちは連辞のそうした性質に気づいていたのか、次のような補足を行っている。「項全体の価値は決して部分がもつ価値の総和ではない；poir X ier は poir＋ier に等しくない」（第一版、p.188）。これは複合語の場合にあてはまることが多い。

例をあげてこのことを説明しよう。たとえば、chat-huant（猫－梟のような鳴き声をあげる）「もりふくろう」、reine-claude（王妃－固有名詞）「西洋スモモ」がその例である。前者のほうが有縁性[8]の度合いが後者よりも高いという違いはあるが、いずれにせよ各要素のシニフィエの総和が複合名詞のシニフィエに等しいわけではない。

第三の問題点は連辞の認定に際して決定的に重要である。sage-femme「助産婦」と femme sage「賢い女性」において、二つの異なる連辞が生みだされるのは確かにその構成要素の並べ替えのおかげである。しかしながらそれ以上に重要なことは、両者の違いを構成要素の置き換えと形容詞や副詞との両立可能性によっても説明できるという事実である。

たとえば sage-femme において、その構成要素 femme を homme に置き換えることは不可能である。それに対して femme sage は容易に homme sage に置き換え可能である。また sage-femme の二つの構成要素の間に形容詞あるいは副詞を挿入することはできない。sage-femme 全体を形容詞と副詞で限定し、une sage-femme très expérimentée となる。一方、femme sage では une femme très sage のように femme と sage は容易に限定詞により隔てられうる。sage-femme のほうが統辞論的結合可能性が femme sage より低い、すなわちそれだけ構成要素自体の結合の度合いが高いといえる。では一体、並べ替え（permutation）、置き換え（commutation）、両立可能性（compatibilité）のいずれを規準にしてこれらの連辞の異なる言語学的性質を説明すればよいのであろうか。

派生語の場合、構成要素の結合の度合いはさらに高い。たとえば infécondité「不妊」の構成要素はどのようであれ並べ替え不可能であり、＊fécond-in-itē は全くバカげた形態である。しかしながら複合語と派生語はその一方で

femme sage にはない共通の統辞論的性質を有している。両者ともに他の言語要素をその構成要素の間に挿入できないのである。従って、femme sage とは正反対の言語学的地位を派生語と複合語に付与しなければならないことがわかる。

上でみたように、ソシュールが言う意味での三つの連辞（sage-femme, femme sage, infécondité）の言語学的地位の相違を説明するために三つの統辞論的規準、並べ替え、置き換え、両立可能性を取り上げてみた。それらは確かに連辞の言語学的分析にとって関与的ではあるが、結局のところ、そのどれをとってみてもそれだけで三つの連辞の言語学的振る舞いの違いを十分に説明することができないのである。

では上記の統辞論的規準は、なぜソシュールが言う意味での連辞を説明するのに不十分なのであろうか。その理由は統辞論的規準そのものの性質が問題だからである。第二の問題点の中で触れたように、連辞の問題にはシニフィエとシニフィアンの両面からの考察が決定的に重要である。ところで、統辞論は言語記号の結合関係を分析する分野であり、連辞の構成要素および回りの他の言語記号との結合関係を扱うのに適した分野ではあるが、その分析を行う前提として連辞自体の言語記号としての性質があらかじめ明確になっていなければならないのである。

言語記号としての連辞の性格を解明する仕事は、ソシュールが次の世代の言語学者に残した重要な課題であったといえる。

Ⅰ．3　機能主義的モデル：記号素、統合記号素、連辞

言語記号の分析のために記号素（monème）という術語を最初に提案したのは Henri Frei[9] である。彼は記号素を以下のように定義した。「シニフィアンが分割不可能で、・・・そのシニフィアンが連辞的に分析できない、・・・そのシニフィアンがより小さなシニフィアンに分割できないようなあらゆる記号」。シニフィアンだけに基づくこの定義は、アマルガムと不連続シニフィアンが存在することで越え難い難問に直面することになる。

ラテン語の bestiarum「獣（複数）の」における -arum は単一の記号素ではなく、属格と複数という二つの記号素がアマルガムを起こしている。ところがそのシニフィアン／a:rum／はそれ以上分割できない。またフランス語の les animaux／lezanimo／では複数を表す記号素が連辞的に不連続なシニフィ

アン／lez...o／となる。

すなわちアマルガムの場合にはシニフィアンはそれ以上分割不可能であるのに、単一の記号素ではなくなり、不連続シニフィアンの場合、記号素は連辞的に分析が可能となってしまう。上の Henri Frei の定義にはこのような問題点があった。

シニフィアンの面だけに基づく記号素分析の欠陥を考慮しつつ、あらたな記号素の定義を試みたのは André Martinet であった。彼の記号素の定義は以下のようになる。「シニフィエに基づき、シニフィアンの変異を考慮しないで認定される最小の記号」[10] を記号素と呼ぶ。

この新たな定義では、ともするとシニフィエがシニフィアンに優越し、あたかもシニフィアンが一切考慮されていないような印象を受ける。Martinet 自身がことあるごとにこの点に関して注意を喚起しているのは、そうした誤解を受けないようにするためであろう。あくまでもシニフィアンの変異が考慮されないのであって、シニフィアン自体を考慮しないと言っているのではないことを理解すべきである。

たとえばフランス語の vache は「牛」と「雌」という二つの連続する記号素を構成するわけではない。同じように taureau も「牛」と「雄」から構成されはしない。Martinet がこのことを説明する際に、「言語的選択（choix linguistique)」[11] に言及しているのは極めて重要であるといわねばならない。上の例において、フランス語の話し手は「牛」と「雄」あるいは「雌」を自由に選択することができない。vache と taureau はそれ自身でお互いに対立する。同じように有縁的ペアである chat — chatte と chien — chienne において、後者は前者から接尾辞 -te と -ne を介して派生される。しかしここでも「雄」という記号素が chat と chien の場合に選択されるわけではない。

つまりシニフィエとシニフィアンの二つの顔をもつ記号素は、たとえそれがアマルガムや不連続シニフィアンとして現れることがあろうとも、常に単一の「言語的選択」を通して現れることを理解しておかねばならない。

上で述べた sage-femme と femme sage の言語記号としての地位の相違はこれにより明らかである。femme sage における femme と sage は、それぞれただ一回だけの言語的選択を通じて現れる単一の記号素であり、このことはシニフィアンとシニフィエの両面について言える。ところが、sage-femme のほうは、シニフィエの面から accoucheuse「産婆」と同じ単一の選択を表す言語単位なのである。従って、sage-femme における sage と femme は二

つの連続する記号素とは言えない。

Martinet は1967年さらに複合語と派生語の両者を包括的に捉えるために「統合記号素（synthème)」という術語を定義しているが、その術語が必要となった理由は、上で既にみたように複合語と派生語には共通の言語学的振る舞い（形容詞や副詞との両立不可能性）が見られるからであった。彼によれば統合記号素とは「意味的に認定できる二つ以上の要素から形成されているように考えられ、かつ全ての点で、置き換え可能な最小記号と統辞的に同じ振る舞いをするような記号全て」[12] のことである。

sage-femme と infêconditê はいずれも意味的に認定可能な二つ以上の要素（sage-femme, in-fécond-itê）から形成されており、sage-femme と infêconditê は置き換え可能な最小記号（＝記号素、この場合はいずれも名詞 accoucheuse と stérilitê）と統辞的に同じ振る舞いをする。

記号素の定義を行うにあたってはシニフィエに基づく定義を行い、単一の言語的選択を強調しておきながら、なぜ Martinet は統合記号素を定義する際にシニフィエの面を前面に押し出さず、むしろ「置き換え可能な最小記号（＝記号素）との統辞的振る舞いの同一性」を規準としたのであろうか。その疑問に我々なりの答を出してみたい。

Vous avez faim と Vous avez raison における avoir のシニフィエの違いを全く問題にしない構造主義者の態度を批判した Emile Benveniste の言葉[13] を思いだそう。avoir faim と avoir raison における avoir のシニフィエの違いを考えることは十分可能であるが、しかしそれにより両者をそれぞれ「単一記号素ではなく二つの独立した記号素の連続」と認定してよいのであろうか。

Martinet は統合記号素を認定するための具体的な二つの規準を提示している。

1　両立可能性の同一性（identitê des compatibilitês）
2　構成要素の非限定性（non-dêterminabilitê des constituants）

シニフィエの面からすれば、たとえば avoir faim は（être）affamê と等価であると言えないこともない。しかし avoir faim は avoir grand faim と言うことができ、その場合 grand は avoir faim 全体ではなく faim だけを限定していると考えられる。つまり avoir faim ではその構成要素 faim

が限定されうるため、上の規準2に従って、もはや統合記号素としては認定できないのである。シニフィエの面における分析は先に述べたように、記号素の認定にとっては第一義的であるが、統合記号素の認定自体にとっては必ずしも十分ではないことがわかる。

Martinet は統合記号素を統辞論的カテゴリーよりもむしろ形態論的カテゴリーとして位置づけたかったものと思われる。だからこそ構成要素の間には如何なる統辞論的限定関係もないこと、また統合記号素が単一記号素と同じ統辞論的振る舞いをすることが重要だったのであろう。換言すると、統合記号素の内部には如何なる統辞論的分析も許されない、許されるのはシニフィアンの変異を分析する形態論分析だけなのだということを Martinet の定義は述べているように思われる。

以上をまとめると次のことが確認できる。femme sage は「二つの独立する記号素の連続」であり、これを「名詞連辞（syntagme nominal)」と呼ぶ。それに対して、sage-femme と infécondité は「二つ以上の記号素の連続のように見えながら、単一の記号素と同じ統辞的振る舞いをする記号素」であり、統合記号素と呼ばれる。その場合に複合語を構成する二つ以上の記号素（sage-femme の sage と femme）を Martinet の用語に従って「接合記号素（monèmes conjoints)」と呼ぶことにしたい。

この前提にたち、以下の論考では複合名詞と統合記号素は同じ性質の言語単位を指示する用語として理解していただきたい。

II　複合名詞の機能主義的分析

統合記号素として複合名詞を分析する場合の主眼は、単一記号素としての言語的特徴の例示、それらの言語形態の類型的分類、そしてそれらが生み出されるメカニズムを解明することにある。ここでは二つのお互いに類縁関係を持たない言語、現代フランス語と現代トルコ語の場合を考えてみたい。

II．1　統合記号素としての複合名詞

フランス語の chou-fleur「カリフラワー」は二つの接合記号素より成り立ち、それらは並べ替えができない（＊fleur-chou)。しかし置き換えテストを行うことにより別の統合記号素が得られる（chou-navet「ルタバガ」)。

Ivan Fónagy はフランス語の連辞と統合記号素の間にアクセントパターンの相違が見られることを報告している。[14] アクセントを平均的なアクセントの重み（average accentual weight）と定義し、第二音節におけるアクセントの重みは、統合記号素である jeune homme のほうが、名詞連辞の jeune femme よりも軽いことを発見した。

Lloyd B. Swift は ev kapı-sı「家の戸」のようなトルコ語にみられる複合名詞のタイプを分析し、三人称の所有接尾辞（ここでは -sı）が特定の「三人称」を指示するのではなく、むしろ複合語自身の符号として機能している点に注目した。この点は評価できるが、Swift のいう「所有複合語（possessive compound）」という意味論的術語は不適切である。彼は一人称あるいは二人称の所有者の場合、上の三人称接尾辞は脱落するとも述べている（例、ev kapı-m「私の家の戸」）[15]。

確かに ev kapı-sı は連辞として「彼の家の戸」、あるいは統合記号素として「家の戸」とも解釈可能である。言語形態としては曖昧であるが、連辞であるのか統合記号素であるのか、両者の統辞論的振る舞いはお互いに異なるためその区別は明白である。onun「彼の」と両立可能であれば、ev kapı-sı は連辞であり、その場合「家の戸」と「三人称所有者（不連続シニフィアン（／onun...sı／）」が問題となる。それ以外では ev kapı-sı は統合記号素であり、単一記号素のように振る舞う。

II. 2　統辞論的関係と複合名詞

既に述べたように、複合名詞を構成する要素の間の統辞論的関係は複合名詞の言語学的定義においてなんら関与的ではない。従って、構成要素の間に必ず統辞的な限定と被限定の関係、あるいは制辞と被制辞の関係が見いだされるわけではなく、見いだされたとしても、それを統合記号素の定義とするわけにはいかない。

ある研究者達は複合名詞にヘッド（head of compounds）なる制辞があらかじめ存在すると考えているが[16]、ヘッドという概念自体が極めて恣意的にしか決定できない場合がある。サンスクリット語文法にちなんで命名されたいわゆる dvandva 複合名詞、たとえばフランス語の canapê-lit「ベッド兼用長椅子」やトルコ語の karı-koca「夫妻」では、一体いずれの要素が制辞であり被制辞であると考えれば良いのだろうか。ヘッドは恣意的に決定されるより他な

いのである。

統辞論的限定の別の例として、複数を表す記号素による複合名詞の限定を考えてみよう。les gentilshommes のようにフランス語では複数を表す記号素が不連続なシニフィアン（／le...z...／）として現れることをすでに見たが、複数を表す記号素は必ずしも統合記号素内の要素を限定しない。les porcs-épics「やまあらし」はしばしば／leporkepik／と発音され、l'oeil-de-perdrix「うおのめ」の複数形は les oeils-de-perdrix であり、＊les yeux-de-perdrix ではない。複数を表す記号素は複合名詞全体を限定しているに過ぎないことがわかる。

統辞論的限定関係が統合記号素内に見られない別の例として、構成要素間の文法性の一致が存在しない例をあげることができる（例、terre-plein「盛り土」）。

このように統辞論的関係は複合名詞自体の分析にとってなんら関与的ではないことがわかる。

II. 3　動的な現象としてとらえた複合名詞

統合記号素内の各要素が限定を受けないのに対し、統合記号素それ自体は限定を受けると上で述べてきた。しかし問題はそれほど単純ではないのである。

フランス語には Notre-Dame-de-l'Epine（地名）のように内部に限定辞（この場合は定冠詞 l'）をもつ統合記号素が存在する。統合記号素の限定は機能記号素（たとえば前置詞）を伴うこともある（例、Laneuville-aux-Bois（地名））。

Gaston Gross はフランス語の複合名詞をその内部における統辞論的関係に従って6つの異なるタイプに分類している[17]。彼は La Corne de l'Afrique「アフリカの角と呼ばれる地域」、l'Empire du Milieu「中国（古名）」、la monnaie-du-pape「ゴウダソウ」を統合記号素ではなく連辞とみなしている。その理由は二番目の名詞が限定辞に先行されるからである。Gross のこの規準は我々にはシニフィアンのみに基づくもののように思える。

二番目の名詞が限定を受け入れないというのは、Martinet の統合記号素の第二の規準（I. 3参照）を満たすものであるが、それだけで必要かつ十分な条件にはならない。Martinet は La Corne de l'Afrique は「萌芽的統合記号素（synthème en embryon）」であり、「統合記号素化（synthématisation）」の動的な過程の中にある言語形態と考えている。こうした統合記号素の自由度（latitudes）に関して、P.H. Matthews が興味深い例をあげている。

英語における複合名詞の構成要素は並べ替え可能な場合がある。たとえば a hospital-mental, isn't it？ あるいは parties, cocktail and otherwise がその例である。彼はそこで mental hospital と cocktail party は複合語ではないのではないかと疑う。しかしその結論として彼が考えたことは、複合性が薄く、意味的なコントラストが可能になる場合にこのような並べ替えが起きるということであった。なぜなら複合性が色濃い deathbed あるいは blackbirds の場合、その意味を保持しつつ ＊sick-and death beds あるいは ＊bird, black and otherwise と言うことができないからであるという[18]。

我々ならばこうした現象を「blackbird と deathbed の方が、cocktail party や mental hospital よりも統合記号素化の過程がより進んでいる」と解釈するにとどめ、内部の構成要素の意味論的解釈（複合性の透明度、意味的コントラスト）に立ち入ることはしないであろう。統合記号素化の現象を理解するに際して、Martinet が最近の著作の中で述べている注意事項に我々は耳を傾けておく必要があるのではないだろうか。「このことに関する本当に科学的な態度は、一刀両断に恣意的な解決をするのではなく、進行中の凝結（figement＝統合記号素化）がもっている不安定な性格を記録しておくことなのだ」[19]。

さて次にトルコ語の複合名詞をこうした動的解釈を参考にしながら詳しく検討することにしよう。

Jean Deny が指摘したように[20]、トルコ語では複合名詞が複数を表す記号素（-ler あるいは -lar）の限定を受けるときに問題が生じる。たとえば deve-kuş-lar-ı「駝鳥（複数）」では、複数を表す記号素 -lar は統合記号素の中に挿入されている。これに対して Deny が「本当の複合名詞」と名付けた yüz baş-ı-lar「大尉（複数）」では -lar は挿入不可能であり、統合記号素の末尾に現れる。

一般に二つの接合記号素からなるトルコ語の複合名詞は次の二つの異なるタイプに分けられる。

1.「名詞＋名詞＋－I[21]（統合記号素のマーカー）」（上記の例を参照）
2.「名詞＋名詞」　例、baş-çavuş「曹長」、複数形 baş-çavuş-lar

二つのタイプの複合名詞が共存する理由を我々なりに説明してみよう。C. S. Mundy の指摘[22]を待つまでもなく、トルコ語には限定要素が被限定要素に先行するという特徴がある。もし最初の要素が形容詞的名詞[23]であれば、複合

語は第二のタイプになる（例、sivri-sinek（鋭い－蠅）「蚊」）。

これに対して限定要素が後置されると第一のタイプが現れる（例、deniz-alt-ı（海－下の －I）「潜水艦」）。二つの異なるタイプの複合名詞はこうした限定要素の現れにおける制約が原因となって生まれたものであると考えられよう。

ところが実際にはこの二つのタイプの間には揺れが観察されるのである。-I が統合記号素のマーカーとして文法化した後でも、トルコ人は demir-yol と demir-yol-u（鉄－道－I）「鉄道」の両方を併用していた。demir-yol が古い形である。同様に Kadı-köy と Kadı-köy-ü（イスラム法官－村 -I）（地名）は並存していた。こちらは後者が古形である。揺れ自体が生じた原因としては、Jean Deny が解釈したように[24]、他の範列要素から受ける圧力等が考えられる。例えば demiryol は tramway yolu「市街鉄道」の圧力で、Kadıköyü は Ortaköy（地名）からの圧力でそれぞれ demiryolu と Kadıköy に変化したのかもしれない。

トルコ語の複合名詞を分析する際に重要なのは、三人称所有接尾辞の -I がもはや所有の意味を持たず、単に統合記号素を生み出すための機能しか果たしていない事実である。従って複数を表す記号素が接尾辞 -I の前に来ようと、後に来ようと統合記号素のシニフィエにはなんらの変化も起きない点に注意すべきである。demiryol-lar と demiryol-lar-ı はそれゆえ「鉄道」+「複数」という同一の連辞を形成する。同様に、demir-baş-lar「備品（複数）」や yüz-baş-ı-lar「大尉（複数）」も二つの記号素からなる連辞である。複数を表す記号素は複合名詞内部の要素を限定するのではなく、複合名詞全体を限定していることがわかる。

Ⅲ　複合名詞のタイポロジーの試み

Ⅲ．1　二つの連続する名詞

このタイプについては既に論じたのでトルコ語における注意事項を一つだけつけ加えるにとどめる。

トルコ語の para mara「お金等々」は統合記号素であるが、複合名詞ではなく、むしろ派生語と考えられる。第二要素はそれだけで単一の記号素にはなりえないし、そのシニフィエは常に「等々」を意味するからである。

Ⅲ. 2　名詞＋機能記号素＋名詞

フランス語の場合に現れる機能記号素は主に de, à, en である
例、Hôtel de ville「市役所」、pied-à-terre「仮住まい」、arc-en-ciel「虹」
トルコ語では様々な機能記号素が現れる
例、bal-lı-baba「オドリコソウ」、kar-dan adam「雪だるま」、el ben-de「子供の遊び」
(-lı, -dan, -de はそれぞれ「付帯」、「離脱」、「位置」を表す)

Ⅲ. 3　動詞を伴う複合名詞

フランス語において最も生産的なのは「動詞＋目的語名詞」のタイプである
例、casse-noisette「クルミ割り」
「動詞＋副詞」のタイプ
例、passe-partout「マスターキー」
トルコ語において最も頻度の高いタイプは「現在分詞（-En）あるいは超越時制分詞（-r)」語尾を伴う
例、buz-kır-an（氷－割る－現在分詞)「砕氷船」
kuş-kon-maz（鳥－とまる－超越時制分詞否定形)「アスパラガス」[25]
「動詞＋名詞」のタイプ
例、ak-an-yıldız（流れる－現在分詞－星)「流れ星」
bil-ir-kişi(知る－超越時制分詞－人)「専門家」

Ⅳ　複合名詞の生成に関する若干の考察

Ⅳ. 1　動詞を伴う複合名詞

Emile Benveniste はフランス語の複合名詞 garde-chasse「密猟監視者」の生成を以下のように説明した[26]。第一要素は屈折を伴う形態ではなく、動詞語幹であり、それは全ての時制と法の現働化（actualisation）の外にある概念である。この概念は従って潜在的な状態として提示され、その状態は複合語の性質と一致する。

Benveniste のこのアプローチは複合名詞の生成を解明する際に極めて重要

である。しかしながら現実には動詞の屈折形を伴った複合名詞が排除されるわけではない。フランス語では laissez-passer「通行許可証」、rendez-vous「会う約束」、qu'en dira-t-on「世間体」が確認できるし、トルコ語にも miras-ye-di（遺産－食べる－三人称定過去）「放蕩者」、ol-up-bit-ti（なる－動詞接続形－終わる－三人称定過去）「既成事実」等がある。

複合名詞の生成過程を問題とする場合に、我々は初めて複合名詞を構成している要素間の統辞的もしくは連辞的関係に言及する必要に迫られる。二つの要素の間の連辞的関係には少なくとも以下の三つのタイプが考えられよう。

1．限定関係
　動詞＋目的語名詞　例、フランス語 porte-parole「スポークスマン」
　名詞＋形容詞　　例、フランス語 coffre-fort「金庫」
　次の章で述べる二つの名詞からなる複合名詞もこれにあたる
　例、フランス語 chef-lieu「行政中心地」, pomme de terre「じゃがいも」
2．主辞と述辞の関係
　例、フランス語 arc-boutant「（ゴチック建築の）飛梁」
3．同格関係
　例、フランス語 passe-passe「ごまかし」

この三つのタイプであらゆる例を説明できるとは思っていない。しかしこのような分類をより厳密に行えば、複合名詞がなぜ生成されたかを説明するための手がかりが見つかるのであろうか。

興味深いことにフランス語の laissez-passer と rendez-vous では、複合名詞の最初の接合記号素は二人称命令形であり、トルコ語にも同じように命令形から生成されたと考えられる複合名詞が存在する。たとえば ateş-kes（火－切る）「休戦」、çal-çene（たたく－顎）「おしゃべりな人」等である。

命令形は言語伝達機能の上から「発動機能（fonction conative)」を担っているとされる。この機能は文字どおり伝達の相手にある動作を引き起こすことを意味している。命令の場合、伝達の相手は伝達が行われる状況からあらかじめ規定されており、その相手を言語記号として明確に表示する必要がない。これによってフランス語でもトルコ語でも、命令文は行為に参加する第一参加項が主辞として明示されない。統辞論的立場から見ると、行為への第一参加項が現働化されない点こそ命令文の最大の特徴である。行為を表す動詞に時制のモ

ダリティーが欠如した命令文もある。たとえば料理の本に見られる battre les oeufs en neige「卵の白味を泡立ててください」がそうである。

動詞を伴う複合名詞が生成される過程の原初的段階には、行為への第一参加者が非現働化される段階があったものと考えられる。具体的な行為への第一参加者（＝主辞）が発話行為において不問となる。これは参加者が潜在化した状態とも考えることができよう。ここでいう行為項の非現働化とは、単にシニフィアンにおけるそれを意味しているだけではない。むしろシニフィエにおける非現働化作用こそ複合名詞の生成に際して決定的に重要であったと言える。そうでなければ、フランス語の qu'en dira-t-on では潜在化した行為への参加者が代名詞 on として現れる（残る？）のに対して、va-et-vient「往来」では文字通り第一参加者が不在であることをどう説明できようか。言語の進化がシニフィエとシニフィアンの両面で平行して起きるとは限らないのである。

トルコ語の imam-bayıl-dı（イスラム僧―気絶する―三人称定過去）「茄子を使った料理」はフランス語の je ne sais quoi「何だかわからない物」とともに、その生成過程を様々に解釈することが可能であるが、いずれにしても第一参加項が非現働化する段階を経て名詞が生成されたことに変わりはない。

以上述べたことをまとめると、連辞から統合記号素として複合名詞が生成されていく過程において、シニフィエの面で行為への第一参加項が非現働化を受けたことが生成過程の第一歩であったと考えられる。そのとき言語記号としての進化は必ずしもシニフィアンとシニフィエの両面で起きたのではないことがわかる。

IV. 2　連続する二つの名詞からなる複合名詞

トルコ語の Paşabahçesi（地名）[27] に関して、Jean Deny はその生成過程を次のように再構している[28]。彼によれば paşa-nın bahçe-si（パシャ－属格接尾辞－庭－三人称所有接尾辞）は属格が脱落し、所有の意味が消失することで複合名詞になったという。

ところで伝統文法において「属格」構文と呼ばれている構文は、所有の意味を表すだけではない。フランス語と英語の「名詞＋de あるいは of＋名詞」構文の意味を詳細に検討した Ivan Fónagy の論文[29]を見れば、この構文の多義性は驚くばかりである。しかしそれらを逐一検討するのは意味分析に譲り、ここでは所有関係を表す場合だけを考えるにとどめよう。

所有を表す名詞連辞において、所有者は行為もしくは事態への第一参加者としてとらえることが許されるであろう。フランス語における oeil-de-chat「キャッツアイ」、トルコ語の Paşabahçesi を考えればそのことが理解できよう。目（oeil）と「庭」（bahçe）を所有するという事態に参加しているのは、それぞれ「猫」（chat）と「パシャ」（Paşa）である。こうした名詞連辞から複合名詞が生成される際にも上で検討したのと同じように、第一参加項の非現動化が必要であったと考えられる。所有関係が様々な機能記号素により示されることは言うまでもない。フランス語では de をはじめ、le livre à Pierre では機能記号素 à が用いられ、トルコ語でも -In 以外に、Ben-de para var.（私－位置格－金－ある）では位置を表す記号素が用いられていることがわかる。それらの機能記号素が複合名詞の接合記号素として現れることはすでに見た（例、フランス語 pied-à-terre、トルコ語 el bende)。

トルコ語の複合名詞には所有接尾辞が現れるものの、それは所有の意味を失い複合名詞であることを示すためのマーカーになっている。この現象は所有関係を表す連辞から複合名詞が生成されるときに、事態への第一参加項としての所有者が非現働化されたことを如実に示しているものと考えられよう。

結論にかえて

本論文ではソシュールの連辞から議論を始め、言語記号としての複合名詞の問題を検討した。その過程で記号素の定義を確認し、Martinet の統合記号素の意義について論じた。

具体的な分析としては現代フランス語と現代トルコ語を例にあげて、その簡単なタイポロジーも試みた。

最後に複合名詞がいかにして生成されたかについて若干の考察を行った。

複合名詞を言語学的に分析するときに極めて重要なのはその言語記号としての地位を考慮しながら分析を進めることであろう。構成要素の間の統辞論的関係はその場合に非関与的である。統辞論的関係は複合名詞の生成過程を解明する場合に重要になるであろう。複合名詞の生成を一つの転移現象としてとらえることはもちろん可能であるが、その現象が極めて複雑なのは、転移が品詞から品詞への単純なものではなく、連辞あるいはさらに大きな発話単位が名詞に凝結していく過程を扱うことになるからである。しかしだからこそ複合名詞の生成過程を解明する研究は興味深い問題を提起するであろうし、探求に十分に

値する分野であると思われる。

註

1）M. Hammond & M. Noonan, "Morphology in the Generative Paradigm", *Theoretical Morphology, Approaches In Modern Linguistics*, 1988, p.1-19.

2）一般言語学講義からの引用は全て R. Engler, *Ferdinand de Saussure Cours de linguistique générale*, 1967, 特に第二分冊による。

3）連辞が統辞論から出た概念ではなく、言語の普遍性に属する概念であること、連辞における連合関係の重要性に関しては R. Godel, "Questions concernant le syntagme", *Cahiers Ferdinand de Saussure 25*, 1969, pp.115-131 を参照。

4）ソシュールがシニフィエの面における連合関係を無視していたわけではない。 *Cours de linguistique générale*, édition critique par T. de Mauro, 1976, Payot の註 253, p.469 を参照。彼が心配したのは構成要素のシニフィエのみに基づく認定方法であったのではないかと考えられる。

5）H. Frei, "L'Unité linguistique complexe", *Lingua 11*, 1962, pp.131-139 を参照。

6）分布主義においてシニフィエが無視されることの問題点については H. Frei "Critères de délimitation", *Word 10*, 1954, p.142 を参照。

7）「有縁性（motivation)」という術語は多義である。ここで言う「有縁性」は言語記号が連合関係において果たす機能としてとらえられる。たとえば pomme は pommier と連合関係を有することで両者の間には有縁性がみられる。

8）この場合の「有縁性」はシニフィアンとシニフィエの間の自然な関係としてとらえられる。chat-huant がある種の「フクロウ」を表すのではないかと自然に予測されるのは、ひとえにシニフィアン -huant の有縁性のせいである。有縁性はさらに音価とその知覚の間に内在する価値を指すこともありうる。 cf. Ivan Fónagy, "Le signe conventionnel motivé Un débat millénaire", *La Linguistique 7-2*, 1971, pp.61-63, Yuji Kawaguchi, "Dimension perceptuelle des voyelles turques", *Acta Orientalia 42 (2-3)*, 1988, pp.351-354 を参照。

9）H. Frei, "Qu'est-ce qu'un Dictionnaire de phrases ?", *Cahiers Ferdi-*

nand de Saussure 1, 1941, pp.43-56. E. Sollberger, "Note sur l'unité linguistique", *Cahiers Ferdinand de Saussure 11*, 1953, pp.45-46 も参照。

10) A. Martinet, "Autour du syllemme", *Revue roumaine de linguistique 25*, No.5, 1980, pp.551-554 (再録 *Fonction et dynamique des langues*, 1989, pp.135-139. とりわけ p.136 を参照)。

11) A. Martinet, "Les choix du locuteur", *Revue philosophique 156*, 1966, pp.271-282 を参照。

12) A. Martinet, "Syntagme et synthème", *La Linguistique 1-2*, 1967, p.14 (再録 Studies in Functional Syntax, 1975, p.195)

13) E. Benveniste, "Ce langage qui fait l'histoire", *Le Nouvel Observateur 210 bis*, 1968 (再録 *Problèmes de linguistique générale 2*, 1974, p.34) 参照。

14) I. Fónagy, "L'accent français : accent probabilitaire (dynamique d'un changement prosodique)", *L'Accent en français contemporain*, 1978, p.150 参照。

15) L. B. Swift, *A Reference Grammar of Modern Turkish*, Indiana Univ. Press, 1963, pp.194-195 を参照。

16) E. Williams, "On the Notions 'Lexically Relates' and 'Head of a Word", *Linguistic Inquiry 12*, p.245-274. E. O. Selkirk, *The Syntax of Words*, 1982, p.21 及び p.27 を参照。

17) G. Gross, "Degré de figement des noms composés", *Langages 90*, 1988, p.61-62 参照。

18) P. H. Matthews, *Morphology, An Introduction to the Theory of Word-Structure*, 1974, p.192 を参照。Benveniste のいう「シナプシ (synapsie)」もこうした統合記号素化の過程を表す単位として考えられよう。単一記号素のように振るまいながら、シナプシは内部要素の限定と両立可能なのである。この点に関しては高田 (1990) の明解な要約を参照されたい。特に pp.28-30 参照。また高田 (1991) が行った予備的テストは、一つの共時態を対象とする時に、統合記号素化が動的共時態として理解されるべき現象であることを雄弁に物語っており、その点で極めて重要な意味を持つ調査と言わねばならない。調査項目のうち、とりわけ Q2, Q3, Q6, Q10, Q19, Q20, Q22, Q25, Q31 を参照。

19) A. Martinet, *Syntaxe générale*, 3.59, Le syntagme, p.83 を参照。

20) J. Deny, *Grammaire de la langue turque* (*dialecte osmanli*), 1921, pp.757-769 を参照。

21) トルコ語では接尾辞に現れる母音の形態は、先行音節の母音により決定される（いわゆる接尾辞の母音調和）。従って、この場合の -I は形態音韻表記であることに注意されたい。-In（属格）や -En（現在分詞）も同様である。

22) C. S. Mundy, "Turkish Syntax as a System of Qualification", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies 17*, part 2, 1955, p.281 を参照。

23) 「形容詞的名詞」という用語は極めて不適切ではあるが、トルコ語のような全ての形容詞が名詞に転移（transfert）する可能性のある言語ではこうした用語が許されるのではないかと思われる。ただし名詞と形容詞の記号素としての地位が混同されてはならない。形容詞がそれ自身名詞の限定詞になることは言うまでもないが、名詞に特有のモダリティーは形容詞と両立できないという点で両者は根本的に異なる単位である。たとえば genç「若い」は bir あるいは -ler と両立する時、名詞とみなされる（例、bir genç「ある若者」、genç-ler「若者達」）。一方、名詞の ana「母」は ana hat-lar「本線（複数）」では形容詞とみなされる。

24) J. Deny, "Les noms composés en Turc de Turquie", *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris 50*, pp.159-160 を参照。

25) トルコ語の複合名詞に現在分詞（-En）あるいは超越時制分詞（-r）が広く見られるのは偶然ではない。トルコ語では現在分詞は特定の現在を指示しない。指示する場合は一般に連辞 -mekte olan が用いられる。また超越時制分詞（-r）は、その名前（aoriste<khronos aoristos「不定時制」）が示しているように特定の時制に対応することがない。これらの分詞が時制を特に指示しないことが複合名詞を生み出すのに役だっていることは否定できないであろう。

26) E. Benveniste, "Convergences typologiques", *L'Homme 6*, p.5-12（再録 *Problèmes de linguistique générale 2*, p.104）を参照。

27) 統合記号素のマーカーが脱落した形態 Paşabahçeもある。

28) J. Deny, (1921 上掲書), p.169 および pp.760-761 を参照。

29) I. Fónagy, "La structure sémantique des constructions possessives",

Langue Discours Sociétê pour Emile Benveniste, pp.45-56 を参照。

参考文献

Bazin, Louis *Introduction à l'ètude pratique de la langue turque*, Paris, 1978.

Benveniste, Emile "Convergences typologiques", 初出 *L'Homme 6*, 1966, p.5-12, *Problèmes de linguistique gênêrale 2*, p.103-112 に再掲載.

— "Formes nouvelles de la composition nominale", 初出 B. S. L. P., t. LXI, fasc.1, 1966, pp.82-95, *Problèmes de linguistique gênêrale 2*, p.163-176 に再掲載.

— "Ce langage qui fait l'histoire", 初出 *Le Nouvel Observateur 210 bis*, 1968, p.28-34, *Problèmes de linguistique gênêrale 2*, 1974, p.29-40 に再掲載.

Cantineau, Jean "Les oppositions significatives", *Cahiers Ferdinand de Saussure 10*, 1952, pp.11-40.

Dede, Müşerref A. *A Syntactic and Semantic Analysis of Turkish Nominal Compounds*, Ph. D. dissertation, University of Michigan, 1978.

Deny, Jean *Grammaire de la langue turque* (*dialecte osmanli*), Paris, 1921.

— "Les noms composês en turc de Turquie", *Bulletin de la Sociêtê de Linguistique de Paris 50*, 1954, pp.144-161.

Ducrot, Oswald「言連鎖：連辞論」、『言語学事典』現代言語学－基本概念 51章、三宅監訳、第19章、pp.141-151、東京、1972.

Engler, Rudolf *Cours de linguistique gênêrale*, fasc. 2, Wiesbaden, 1967.

Ergin, Muharrem *Türk Dil Bilgisi*, 7e êd., Istabul, 1982.

Fônagy, Ivan "Le signe conventionnel motivê Un dêbat millênaire", *La Linguistique 7*, fasc. 2, 1971, pp.55-80.

— "L'accent français : accent probabilitaire (dynamique d'un changement prosodique)", *L'Accent en français contemporain*, 1978, p.123-233.

— "La structure sêmantique des constructions possessives", *Langue Discours Sociêtê pour Emile Benveniste*, 1975, pp.44-84.

Frei, Henri "Note sur l'analyse des syntagmes", *Word 4*, 1948, pp.65-70.

— "Critères de délimitation", *Word 10*, 1954, pp.136-145.
— "L'Unité linguistique complexe", *Lingua 11*, 1962, pp.128-140.
Gencan, Tahir Nejat *Dilbilgisi*, Ankara, 1979.
Godel, Robert "Questions concernant le syntagme", *Cahiers Ferdinand de Saussure 25*, 1969, pp.115-131.
— "Les limites de l'analyse segmentale et la réalité du mot", *Cahiers Ferdinand de Saussure 32*, 1978, pp.125-134.
— *Les Sources manuscrites du Cours de Linguistique Générale de Ferdinand de Saussure*, 2e tirage, Genève, 1969.
— "Actualité de la linguistique saussurienne", *Dilbilim 5*, 1980, pp.37-47.
Grevisse, Maurice *Le Bon Usage*, 8e éd., Editions J. Duculot, 1964.
Gross, Gaston "Degré de figement des noms composés", *Langages 90*, 1988, p.57-72.
Hammond, Michael & Noonan, Micheal "Morphology in the Generative Paradigm", *Theoretical Morphology, Approaches In Modern Linguistics*, 1988, Academic Press, pp.1-19.
Kawaguchi, Yuji "Dimension perceptuelle des voyelles turques", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae 42* (2-3), 1988, pp.339-360.
Le Bidois Georges et Robert, *Syntaxe du français moderne*, tome 2, 2e éd, Edition A. et J. Picard, 1967.
Martinet, André "Les choix du locuteur", *Revue philosophique 156*, 1966, pp.271-282.
— *Studies in Functional Syntax*, München, 1975.
— *Grammaire fonctionnelle du français*, Paris, 1979.
— *Syntaxe générale*, Paris, 1985.
— *Fonction et dynamique des langues*, Paris, 1989.
Matthews, P. H. *Morphology, An Introduction to the Theory of Word-Structure*, Cambridge, 1974.
Molino, Jean "Où en est la morphologie?", *Langages 78*, 1985, pp.5-40.
Mundy, C. S. "Turkish Syntax as a System of Qualification", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies 17*, part 2, 1955, pp.279-305.

Scalise, Sergio *Generative Morphology*, Dordrecht-Holland, .1984.

Selkirk, Elisabeth O. *The Syntax of Words*, The MIT Press, Cambridge, 1982.

Sollberger, Edmond "Note sur l'unité linguistique", *Cahiers Ferdinand de Saussure 11*, 1953, pp.45-46.

Swift, Lloyd B. *A Reference Grammar of Modern Turkish*, Bloomington, 1963.

高田晴夫、「シナプシについて」、新潟大学人文科学研究 77, 1990, 27-44.

— 「シナプシと変異形の間の選択に関するアンケート」、新潟大学人文科学研究 80, 1992, 145-170.

Tietze, Andreas "Der freistehende Genitiv im Türkei-Türkischen", *Ural-Altaïsche Jahrbücher 30*, 1958, pp.183-194.

Trubetzkoy, N. S. "Le rapport entre le déterminé, le déterminant et le défini", 初出 Mélanges de linguistique offerts à Charles Bally, Geneva, 1939, p.75-82. *Readings in Linguistics 2*, Chicago, 1966, pp.133-138 に再掲載.